

「ジャポニスム2018」続報 5

2018年10月17日からパリ日本文化会館で「縄文ー日本における美の誕生」(以下「縄文」)展がスタートしました。前日の内覧会には宮田文化庁長官、銭谷東京国立博物館長、縄文作品を所蔵する市町村の関係者も大勢出席されました。

また、18日には安倍総理とユネスコのアズレー事務局長が前後して同展をご覧になりました。

本号では、その「縄文」展のオープニング周りのニュースをお届け致します。

目次

- | | |
|-----------------------------|-----|
| 1. 安倍総理が「縄文ー日本における美の誕生」展を視察 | 2~3 |
| 2. ユネスコのアズレー事務局長が「縄文」展を視察 | 4 |
| 3. 「縄文」講演会とオープニング・レセプション | 5~6 |
| 4. 「縄文」展と同時に「明治」展もオープン | 7 |

① 安倍総理が「縄文—日本における美の誕生」展を視察

10月18日午前10時過ぎ、安倍晋三内閣総理大臣がパリ日本文化会館を訪問され、17日から公開された「縄文—日本における美の誕生」（以下「縄文」）展を視察されました。表玄関前で安藤裕康国際交流基金理事長と筆者が首相御一行をお迎えし、そのままフランス式2階の展示場へと移動しました。

安倍総理はまず入り口正面に展示されている国宝の火焰深鉢型土器の前からスタートし、前半は文化庁の原田昌幸主任文化財調査官の、後半は東京国立博物館の品川欣也（よしや）考古室長の説明を熱心に聞き入りながら、次々に作品を鑑賞されましたが、国宝の土偶5点が飾られたコーナーでは特に関心を示され、「着ている衣服のデザインはどうなっているのか?」「眉や目に特徴があるね。」「なんか宇宙人のようだね。」などと質問や感想を述べられました。また、最後のコーナーにある漆を施した木器や土器をご覧になると、縄文時代から漆が使われていたことに驚き、また感嘆された様子でした。

安倍総理は20分程度の「縄文」展ご鑑賞後、1階の館長室に移動して、オドレー・アズレー・ユネスコ事務局長と半時ほど会談され、11時頃パリ日本文化会館を後にしました。この日はパリ日本文化会館の館長室が日本国総理の会談室に早変わりし、日本国旗と国連の旗が置かれました。

「縄文」展は2018年12月8日（土）までパリ日本文化会館で開催されます。なお、安倍総理の当館ご訪問は2014年5月5日以来二度目となります。

パリ日本文化会館に勢ぞろいした国宝の「縄文」6点



火焰深鉢型土器



合掌土偶



仮面の女神土偶



縄文のビーナス土偶



縄文の女神土偶



中空土偶

(文化庁 HP より: http://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/1410019.html)



「縄文」展を視察する安倍首相 (©Hiroyuki Sawada 写真: 国際交流基金)



会談が行われた館長室 (写真: ©UNESCO/Christelle ALIX)

② ユネスコのアズレー事務局長が「縄文」展を視察

安倍総理との館長室での会談終了後 11 時過ぎに、総理一行は次の予定地へと会館をあとにしましたが、ユネスコのアズレー事務局長は少し時間がとれるということで、「縄文」展を視察されました。予定では 10 分程度と聞いていましたが、実際には縄文に非常に興味をお持ちになり、質問も多かったので、予定を大幅に超過して 11 時半頃まで鑑賞されました。

山梨県甲州市から出土した高さ 72cm の大壺の前では「縄文とはどういう意味なのか？この模様はどのように施されたのか？」、青森県つがる市から出土した遮光器土偶の前では「こうした土偶はどのように使われたのか？」などと質問し、最後の装身具類のコーナーでは「こうした縄文の作品は日本の一定の地域から出土したのか？」という質問があり、「日本全国から出土しているが、今回は 21 の道県から出品されていて、日本でも同時に見る機会は稀です。」と聞くと、「私たちフランス人は恵まれていますね。」と感激した様子でした。また、青森県弘前市出土の猪の置物の前では「顔がとても親しみやすくて怖くないわね。」との感想をもらされ、「実際は背中毛を逆立てて怒っている姿です。」と聞くと、「あら、そうなの？」と笑っていました。アズレー事務局長は 11 時半頃に会館を後にしました。



「縄文」展視察を終えたユネスコのアズレー事務局長（左端）と
安藤国際交流基金理事長、山田ユネスコ日本政府代表部大使、筆者）

（写真：©UNESCO/Christelle ALIX）

③ 「縄文」講演会とオープニング・レセプション

安倍総理のご視察が実施された前々日の10月16日18時から東京国立博物館の井上洋一副館長とローラン・ネスプルス INALCO 准教授による「縄文」に関する講演会がパリ日本文化会館小ホールで実施されました。

井上副館長は筆者同様に20年前のパリ日本文化会館で開催した「縄文」展の担当もしていたため、今回の「縄文」展実現に感慨ひとしおの様子でした。

井上副館長は縄文作品と三宅一生の羽織に見られるような現代のデザイン、そして現代のやかんや茶ポット、ポシェットなどと比較しながら、分かりやすくユーモアを交えて、縄文の美意識が現代にも受け継がれていることを解説しました。あいにく筆者は途中で退席し、冒頭挨拶のため5階のレセプション会場に移動したため、ネスプルスさんのお話は聞けませんでした。縄文の人気はフランスでも凄まじいものがあり、会場に入れないキャンセル待ちの人が大勢いました。



「縄文」講演会の様子 (©Hiroyuki Sawada 写真: 国際交流基金)
(檀上左からネスプルスさん、井上副館長、右端は通訳のマルタンさん)

講演会が終わる前の19時半頃からパリ日本文化会館フランス式5階のレセプション・ホールで「縄文」展関係者と招待客を対象としたレセプションが開催されました。

会場には、木寺昌人駐仏日本大使ご夫妻、山田滝雄ユネスコ日本政府代表部大使、宮田亮平文化庁長官、銭谷眞美東京国立博物館長のほか所蔵者である長野県茅野町、新潟県十日町、山形県舟形町、そして山梨県の辰馬考古資料館の皆様、そしてパリ日本文化会館運営審議会委員のクリスチャン・ソテールさんご夫妻ら、大勢の招待客で賑わいました。

筆者は挨拶の中で、20年前にパリ日本文化会館で開催した際には当時のジャック・シラク大統領や人類学者のクロード・レヴィ=ストロース、アンリエット・ルロワ=グーランさんらが来訪したことに触れつつ、今回は国宝3件（比較の意味で、その後国宝になり今回も出品されている2件を含む）、重要文化財24件、計45件でしたが、今回はそれらが6件、33件、64件と、大幅にスケールアップしたこと、また、前回最古の展示品は紀元前5千年前のものでしたが、今回はそれが紀元前1万1千年前と、時代的にもより長期間にわたる作品が展示されていることをお伝えしました。



宮田文化庁長官によるご挨拶 (©Hiroyuki Sawada 写真: 国際交流基金)



銭谷東博館長のご挨拶を聞く来場者 (©Hiroyuki Sawada 写真: 国際交流基金)

④ 「明治」展オープニング

「縄文」展の内覧会があった10月16日17時半からギメ東洋美術館で明治時代に焦点を当てた、日本近代絵画、工芸、テキスタイル、ブロンズ像など多岐に亘る作品を通じて日本の明治時代を紹介する展覧会の内覧会もありました。同展は「ジャポニスム2018」の公式企画ではありませんが、国際交流基金が特別協力という形で関わっています。

筆者は「縄文」展講演会の冒頭挨拶がありましたので、内覧会に行くことができないため、内覧会の始まる前の15時頃ギメ美術館へ行き、一足先に展覧会を見せて頂きました。その時間にはまだ展示作業が完了しておらず、キャプション等が仮止めしてありましたが、作品はきれいに陳列されて内覧会の準備が整っていました。

明治時代の驚くべき技法の作品群が多く展示されていますが、特に日本画家として初めてパリに留学し、エドガー・ドガとも親交のあった渡辺省亭の作品や、超絶技法による非常に手の込んだ精巧な木村渡雲のブロンズ作品など、見どころが沢山あります。

「明治」展は2019年1月14日(月)までギメ東洋美術館で開催されます。



「明治」展入り口付近の展示風景（ギメ東洋美術館）



「明治」展招待状

以上